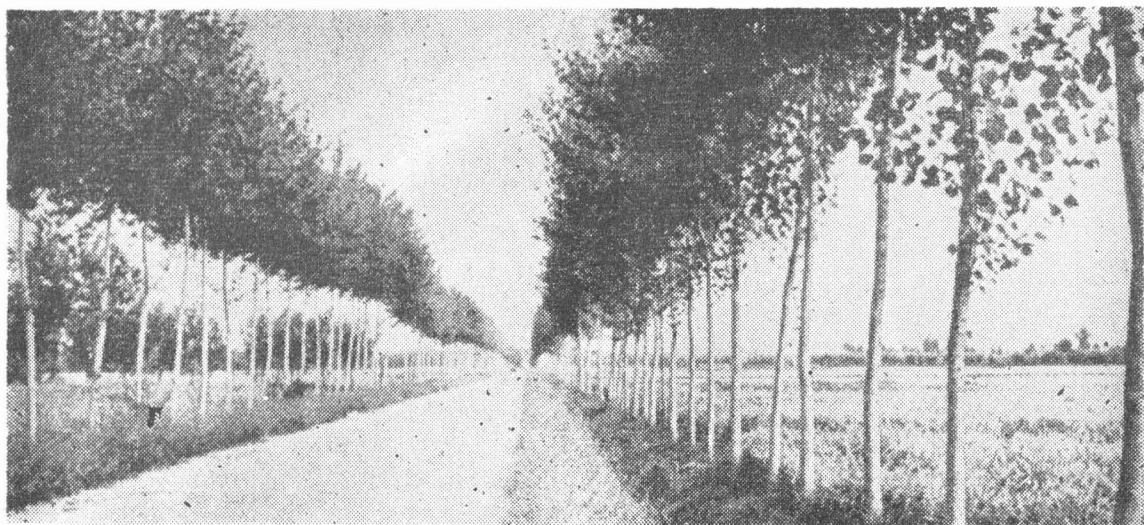


琉球大学学術リポジトリ

苗木の植え付けと育て方について

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-05-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大山, 保表, Oyama, Hohyo メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/19642

苗木の植え付けと育て方について



わが地球では、毎年三月十八日より二十五日までの七日間が、愛林週間に設定されておりますので、まもなく一九五七年の愛林週を迎えることとなります。琉球政府では同週間に住民大衆に対して、樹木や、森林への理解と愛護の念を深めてもらつと并になるべく多くの男女の手で、一本でも多くの樹が植え付けられ、育てられるように、苗木の無償配付や、植え付けの指導など、全住民が島の緑化と維持に協力してもらうための、愛林諸行事が計画されております。

世界各國でも愛林日を年中行事に設定して全國民の森林愛護思想の普及や、積極的な植樹と撫育などの協力によつて、全國民の緑化の案をあげ、緑化による國民の受益を最高度に奨揚するよう、懸念な努力と、強力な運動が展開されております。樹木の存立による効用は、甚だ多方面にわたり、且つ吾々の経済的精神的生活面と、甚だ密接なつながりにあります。

戦争によつて失われた緑の島の復元は、これからと云ふ現状にあります。近くは吾々の宅地より、遠くは山岳の頂上まで全島を緑化して、美しい住みよい島、暴風や潮風や干ばつの害におびえない島にしたいものです。

以下苗木の植え付けについて簡単に説明致します

一、苗木の活着について

掘り取られた苗木が移し植えられた場所で落ち着くようになり、根では水分や養分を吸収し、葉からは水分を蒸散したり炭素同化其の他の栄養代謝を行うようになって、根、幹、枝葉の栄養器官を発生し出して安全な生育が期待されるようになった場合にその苗木は活着したことになります。

苗木の活着の良い悪いはいろいろの条件によつて差がありま

【写真はイタリーの水田地帯を貫く清路とポプラ並木】

(林業新知識一月号より)

すが主な条件を上げますと、苗木が自質のものであるかどうか、掘り取つて植え付けられる時期が適期であるかどうか、掘り取りから植え付けの技術が適切であるかどうか、植え付けた後の管理がよく行き届いたかどうかなどによつて活着の成績に大きな差を生ずることになります。

1、良質の苗木を植えませよ

苗木は養成の仕方や、養成された環境の相違によつていろいろな形や質の苗木が出来上ります。

環境や仕立方がよいと健全な良質の苗木が沢山得られることになりま

す。良質な健全苗木は活着がよいことは申すまでもありません。健全な良質の苗木とは、苗木全部の根が均衡のとれた生育を遂げていて、地上部の重さと、地下部の根の重さとの比がなるべく小さい値を示す苗木とされて居ります。

詳しく申しますと、幹は通直で幹分れがなく、組織は堅くて地際直縁はよく頑丈に生育し、完全な頂芽をつけていること、枝の張り方は四方によく広がっていて、枝葉の着生点も下方部にまで及び、適当に繁茂していること、根部も全般的に均衡のとれた発達をしていて、主根はよく垂直に伸びるが深く伸び過ぎず、四方に広つた側根や手根を多数つけていることなどがあげられます。

勿論均衡のとれない徒長苗とか、病虫害や外傷を受けて苗木の一部が折損したりした苗木は不良苗であつてさげねばなりません。

苗木が大き過ぎたり、小さ過ぎたりしますと掘り取りや植え付け作業に無理があったり、生活力が弱かつたりして活着が悪くなりますし出来ることならば、植え付け場所の土性や、環境に似た苗畑で養成された苗木を手に入れることも望ましいことです。

2、植え付けの時節

移し植えられる苗木の活着がよいかどうかは植えられる時節が適切であるかどうかで差があります。植えられた苗木が直ちに新しい根や芽をどしどし発生して、安全な生育に間もなく達し得るような再生力の旺盛な苗木の生理状態であるかどうか、植えられる苗木が活着し、引き続いて安全に生育を遂げるのに好都合な気候かどうかと云うことが重要であります。

苗木は苗木の間に含れる水分量が、一定量以下になると枯れてしまつたもので、掘り取つて新しく植えられた苗木は、吸水は甚だしく減じて蒸散は割に大きいと云つた極めて危険な状態にあります。かかる危険な状態が一刻も早く取り除かれて、苗木

の枯死点とされる苗木の含水率にまで乾く状態が防がなければ苗木の活着は望めないことになり、植えられた苗木は枯れてしまつたことになります。

ところで苗木の含水率を出来るだけ高く保持させるためには吸水量の増加をはかることと、蒸散量を出来るだけ減ずることが必要で吸水量の増加については、新しい根をどしどし発生伸長させるような、苗木の生理状態の時節が最もよいことになり、樹裡によつて多少の差はありますが、一般には春の初め頃の新生を掘り前がよいとされ、春についてはまだ根が伸長しつゝある晩秋の頃もよいことになっております。

苗木地上部の蒸散量を出来るだけ少くすることにつきまして

は、蒸散量が割に大きい新葉をつけていない春の初めの芽を掘り前が大愛好都合であります。落葉直後や新葉の組織が完全に固つて、蒸散量も溫和な気候と相まつて減少しているが、なほ根は伸長を続けている晩秋もよいことになります。

琉球に於きましては愛林週間前後より雨に纏まれる梅雨の初期頃までは好時節と云へませう。秋の植え付けは、冬期に季節風がありますので、それまでに充分活着して新しい根の伸長を遂げることが必要で、秋の終期はさけて前半期が好期でせう。暑気もひどく暴風期でもある七月乃至九月は勿論さけるべきです。なほ植えられた苗木の吸水を容易にして吸水量の増加をはかるためには土の水分が豊富であることが必要で、土が乾く程



◆写真説明◆

上、茨木県友部市畑の一部(二坪生)ヒノキ床替及寧務所

中、秋田県羽根山のスギ(六五三生)造林地

下、奈良県吉野地方のスギ(山の巾腹以下)ヒノキ(山の巾腹以上)の造林地

及同造林地内の郡岡河漸材更新地

苗木は、土中水分の吸水が困難になります。したがって適当な降雨のあることは、その絶対条件になります。又苗木からの蒸散量は、温度の高まるにつれて幾何級数的に増加しますし、空中湿度については、湿度が低くて乾燥度が高い程前と同様に増加し、空気の流れ即ち風の速度については、速度が早い程同様の結果となって増加しますので、以上の諸条件を参考にするれば、前述した時節が移植適期と云へます。最も移植植物の一部や、やし類や、枝葉の芽を伸長が甚だ遅々としていて枝葉の堅厚な樹種は、剪定をさせて新葉が堅まって蒸散量の減ずる然も降雨に濡まれる梅雨期の方が、好時期と云へませう。

3、植え付けの技術について

植え付ける苗木の活着をよくするためには、植えられるまでの苗木の乾燥を、最少限度にいとめるように、苗木を損傷しないように又植えられた苗木が出来るだけ早く吸水出来るようにすると共に、蒸散量を出るだけ抑へて少なくするように、掘取、選苗、剪定、包装、輸送、解包、植付などの諸作業が、適切迅速になされねばならない。

掘取

掘取は晴天の日中をさけて、曇りの日や、早朝や、夕方などの、風のない又は弱い日に迅速に掘り取つて樹陰や窪みなどに入れるとか、粘り汁に根を浸すとか、カマズで覆ふとかして、日光や風をさけて、乾燥を最少限度に喰ひ止める手段をほどこす。又根の地上部分を損傷しないように注意する。特に根部の損傷や乾燥をさけるように注意する。

選苗及剪定

掘り取つた苗木は、大きさや、生育の健全度などによつて選別分類した後、根部長すぎて植え付けや、取扱が不確定となり得るような根は剪定する、但し直根性が強くて、側根の発達極めて貧弱となる極端な直根性を表すテリハボクやフクギなどは剪定をひかえる。かかる樹種は直根の先端部の柔い生長部で新組織を発生増大して、直根を伸ばしたり側根を分岐したりするので、直根を剪定されると新しい根の発生が恐らくな

ります。地上部は根につり合う程度に側枝や葉を適宜剪定して、蒸散を少なくするようにする。

但し心立ちの悪いスギ、ヒノキ、イヌマキ、リウキウマツ等の針葉樹類は、頂芽の剪定をさしひかえないと、上生長が悪くなつたり、樹形が悪くなつたり、枯れたりします。

包装、輸送、解包

剪定のすんだ苗木は、一定本数づつをまとめて根の側の部分はその間にぬれた水苔とか、葉などをはさんで、その上をぬれたカマスなどで包み、更に乾いたカマスで苗木全体を包装する輸送は迅速にし、途中直射日光や風にさられないように注意する。

解包はやつぱり風や日射をさけ得る所で行い、輸送の途中で折損した部分を剪定して、迅速に植え付けにかかると、折損した部分は、剪定した部分は剪定した部分に比べて、新組織の発生増大が悪く、且病菌も侵入し易くなります。

植え付け

植穴は充分に大きく深く掘る、植え付け用の土は、小石や草根や木片などを取り除く、周辺の表土をかき集めてそれを用ればよい。若し土質の表土が得られない場合は、他所から土質の土を運んで客土に用る様に準備する。植穴には腐熟堆肥を充分敷き込む、覆土用の土に小石や草根や木片が混つっていると、空隙が出来て、苗木の根と土粒の密着や土の水もちが悪くなり、根の吸水や、新根の発生伸長が悪くなります。左手で苗木の幹部を垂直に持ち、苗木の元の地際部が植穴の地表面の高さになる様に支え、各々の根を自然のままの状態に広げ伸し、絶対に先端を曲げたりしない。根を曲げたり、不自然に植え付けると根の伸長が悪くなります。右手で土を少量づつ四方に均等に入れつつ指先や棒などでつき固めながら覆土してゆく、植穴の七分分厚覆土したら、灌水して棒でよくねり固めた後、地表面の高さまで覆土する、植え付けが終るまでは、常に左手で苗木をやや上方へ引張るように支持しつつ、つき固めにより苗木が下つて根が出ることをひかえるようにする。浅植えは、根の乾燥や

苗木の動揺を来して枯れ易く、又深植えは、生長が悪くなりますので、浅植え、又は深植えをさけねばなりません。

覆土が終つたら充分に灌水して、土粒の沈下密度をはかる。以上つき固め、ねり固め、灌水などによつて、各々根の表面と土粒を密着させて、土中水分の吸収を容易にする。団粒構造の発達したよい表土で覆土すれば、水もちもよく、通気性もよくて新根の発生伸長に好条件となり、堆肥を混用すれば更に結果はよくなります。三本の支柱を土に固定し、苗木の幹の上部を支柱に結びつけて、風其の他による動揺を防ぐ、苗木の動揺は苗木の乾燥を高め、根の土粒との密着をゆるめ、動揺の甚だしい時には、地上部や根、特に側根などが切断されます。土の乾燥や、雑草の繁茂や、灌水及降雨による土の団粒構造の破壊を防ぐため、地表に敷草をほどこす。

二、植え付け後の管理

植え付け後は時々灌水して土を湿潤の状態に保つようにする。適宜除草して雑草による水養分の浪費を防ぐ、苗木の側方や上方の日光をせよ断して日光不足による苗木の生長不良を招くような苗木周辺の雑草類も取り除く。生長期の初春初夏初秋の候に施肥を行う。

暴風期には支柱を補強し、暴風後には動揺をなおして、根部の土固めや、折損した枝の剪定をなし、適宜予防剤を撒布して病虫の防除につとめる。折角植えられた苗木が後の手入れ管理が行き届かないため枯れることに惜しいことであり、苗木はある程度大きくなつて、生活力が強くなり外部の悪い環境や障害に對して、充分抵抗力が出来るまで、植え付け後の手入れを加えれば、後は生長とともに生活力も強くなり、安全な生育が期せられるようになります。

(大山保表)

